

知的障害児の排泄行為・指導に関する現状と課題^{※1}

—知的障害特別支援学校小学部教師への質問紙調査を通して—

山 下 かなほ^{※2}・杉 岡 千 宏^{※2}

本研究では、知的障害特別支援学校小学部の学年主任を対象に①排泄行為に困難が生じる児童の実態、②教師による排泄指導・対応、③効果的な指導法を行うために必要な教員に対する手立てについて検討することを目的として、質問紙調査を実施した。その結果、①に関しては、在籍する児童の45.7%が排泄行為に困難を抱えていること、排泄行為の一連の流れにおいて困難が生じる場面についてはトイレへの入室までの場面が多く挙げられることが明らかとなった。②排泄指導については「定時誘導」や「付き添った指導」の回答が多く見られた。一方、「観察中」や「まだ指導していない」という指導に至っていない回答も多かった。効果的な指導場面の回答件数の割合は、トイレへの入室までが77.2%であり、トイレに入って以降の場面においては22.8%となり排泄以降の場面における技術獲得や指導が高度であること等が推察された。③の分析では、多くの教員は児童の実態把握を適切に行うことや教員同士の助言によって効果的な指導法にたどり着くことが多いことや、家庭との連携により効果的な手立てを講じることができることが推察された。本来、指導法や対応は児童の実態（併せ有する障害種・知的発達の種類等）により異なることが前提であることを考慮すると、児童一人ひとりの実態や排泄に困難を及ぼす背景について明らかにした上で、検討することが今後の課題である。

キーワード：排泄行為、排泄指導、知的障害、特別支援学校小学部

I. 問題の所在

谷田貝（2008）では、「排泄」は食事、睡眠、着脱衣、清潔の5つの基本的な生活習慣の中の1つであるとされており、人が生まれて、社会に適応して生活する上で不可欠かつ最も基本的な事柄であると示されている。岩崎（2017）は、排泄の自立は「生活上の機能獲得以上に自我の形成にも影響を与える重要な経験」であり、「他の生活動作に比べて自己コントロールが求められる部分が多いだけに、それが獲得されたときに得られた自信

と自己充足感は大い」と示している。そのため、排泄の自立が社会に適応して生活する上で重要であるといえる。

知的障害児の排泄の自立に関して篠田（2021）は「知的障害児における排泄の自立は日常生活に関わる重要な課題の一つである」とし、「知的障害児はトイレット・トレーニングの効果が上がりにくい」と示している。武藤・唐岩・岡田・小林（2000）も、「排泄行動の未自立は、知的障害児・者の基礎的な問題である」と示している。このように、これまでの研究で知的障害児の排泄自立、トイレット・トレーニングに困難性があることが報告されている。

これまでの排泄行為や排泄指導に関する研究では、おむつが外れる段階までの実践研究は多々見られる。そんな中、畠山（2017）は特別支援学校での排泄指導に関して、おむつへの排尿からトイレでの排尿以降の場面や、排泄の意思表示の指導

※1 The Current Status and Issues in Excretory Behavior and Training of Children with Intellectual Disabilities: Through a Questionnaire Survey to Teachers of Elementary School for Special Needs Children with Intellectual Disabilities

※2 福岡市立今津特別支援学校

※3 明治学院大学 心理学部

の重要性を報告している。しかしながら、これまで排泄行為一連の流れ全体（オムツが外れた後の指導や排泄以前のトイレに向かう場面で困難、排泄後の困難など）における実践研究や実態把握はあまりみられない。

西尾・三宗・小山・水野（2007）は排泄行為・排泄指導の調査研究を行い、特別支援学級の児童・生徒の排泄行為の実態と教員の指導上・介助上の苦労などについては検討しているものの、対象児童は特別支援学級の知的障害児に限られる。

このように、これまでの研究では、排泄の自立の重要性や、知的障害児の排泄行為の困難性、日常生活の指導における実態調査の必要性が報告されている。一方で、知的障害特別支援学校での排泄行為の実態調査や指導法については報告が少ない。

以上のことから、知的障害特別支援学校の児童を対象として、排泄行為の一連の流れに沿った児童の排泄行為の実態調査を行い、現状把握したうえで指導法の検討をしていく必要があると考えられる。そこで、本研究では、知的障害特別支援学校の小学部を対象として児童の排泄行為の実態を把握・分析する。また、教員が行う排泄指導の現状と課題、効果的な指導法を行うための手立てについて明らかにし、今後の知的障害特別支援学校における排泄指導の在り方を検討する。

Ⅱ. 方法

1 対象者

九州地方にあるすべての知的障害特別支援学校小学部（88校）の学年主任、各校6名（計528名）を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。返送の得られた回収数253部（回収率47.9%）のうち、無回答で返送した7部のデータを除き、246部のデータ（46.6%）を分析に用いた。

2 期間

2022年8月上旬から9月上旬

3 調査内容

（1）語の定義：本調査では、「排泄行為における一連の流れ」を、飯田（1998）を参考にして、尿意・便意の確立、尿意・便意を感じてトイレに行く、扉・鍵の開閉をし、衣服を脱衣する、便器に

向かう・腰掛ける、紙をもって尿・便をトイレトペーパーで拭く、衣服を着衣する、水を流す（水遊び等をしない）、手を洗うという行為と定義した。また、「排泄行為の困難」とは、これらの排泄行為の一連の流れの中で児童に躓きが生じ、自立して行えない場面を指し、排泄行為の中で不適切な行動をとることも含め本研究では「排泄行為の困難」として定義する。

（2）調査項目：調査項目は、大きく今年度の児童についてとこれまでに担当した児童についての2つの視点で構成されている。今年度の児童については、（1）今年度、学校生活場面において排泄行為に困難が生じた児童の有無、いた場合、（2）困難が生じた児童の学級内の人数、（3）性別、（4）知的発達程度、（5）知的障害以外に併せ有する障害種、（6）排泄の一連の流れにおいて困難が生じる場面、（7）考えられる原因・理由、（8）行った指導内容・対応の8項目である。これまでに担当した児童については、（9）これまでに担当した児童の中で学校生活場面において排泄行為に困難が生じた児童の有無、（10）指導の有無、（11）最も指導の効果を感じた児童の学年・性別・併せ有する障害種・知的発達程度、（12）児童に生じた困難の場面、（13）考えられる原因・理由、（14）行った指導内容・対応、（15）具体的な指導内容・対応、（16）その指導の結果（児童の様子）（17）その指導の効果の有無、（18）指導の効果があつた場合に、効果に繋がると考えられる支援や手立て、（19）指導の効果がみられなかった場合に必要と感じた支援や手立ての11項目である。

（3）具体的な調査項目と回答方法：以下の項目に関して選択式で回答してもらった。（4）発達程度に関しては、「軽度」「中度」「重度」「最重度」「その他」から一つ。（5）知的障害以外に併せ有する障害種に関して、「ダウン症」「自閉スペクトラム症」「ADHD傾向」「聴覚障害」「視覚障害」「肢体不自由」「脳性まひ」「その他」の中から当てはまるものすべて。（6）学校生活場面で排泄の一連の流れにおいて困難が生じる場面に関して、「①オムツからパンツへの移行」「②失禁」「③尿意に関する意思表示」「④便意に関する意思表示」「⑤トイレへの入室」「⑥便器前で適切なタイミングで衣服の着脱を行う」「⑦必要以上の脱衣（床に付く程度までズボンを下げてしまう等）」「⑧ドアの開閉・ドアを開けたままでの排泄」「⑨鍵の開閉・

鍵を開けたままでの排泄」「⑩便器・便座の正しい使用の仕方（姿勢の持続・立ち位置等）」「⑪力む」「⑫便器に座るもしくは、便器前に立って尿を出す・出し切る」「⑬便器に座って便を出す・出し切る」「⑭トイレトペーパーで拭く」「⑮排泄物を触る・遊ぶ等の行為」「⑯トイレ内での水遊び」「⑰水を流す」「⑱手を洗う」「⑲その他」で当てはまるものすべて。「⑲その他」を選択した場合は、困難の内容を記述してもらった。(7) 困難が生じたと考えられる原因・理由に関して、「ア. 身体の未発達」「イ. 感覚の未発達」「ウ. 物事に夢中になっている」「エ. コミュニケーションに問題があり、伝達ができない」「オ. 情緒の不安定さ」「カ. 場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的な経験の影響等も含む）」「キ. 手先の操作技術の未獲得」「ク. 不快を感じていない」「ケ. 感覚の過敏さ」「コ. 習慣化してしまっている」「サ. こだわり・特性上」「シ. 生活リズムのズレ」「ス. まだ指導をしていない」「セ. その他」「ソ. 理由はわからない」「タ. 改善している途中」の中から、当てはまるものをすべて。(8) 行った対応・指導内容に関しては、「a. 観察中（行動観察等）」「b. 医療的観察中」「c. まだ指導の段階ではないと判断し、その困難に関する指導は介助で良しとしている」「d. 排泄行為の基本課題ではないと判断し、介助で良しとしている」「e. その場面の指導に介入していない（性別上・その他の理由等）」「f. その場面の指導に関しては、家庭に任せている」「g. 定時誘導：児童の行動パターンを把握し、あらかじめ決めておいた一定の時間でトイレに誘導する指導」「h. 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする」「i. 絵カード・サイン等を使って意思表示をさせる」「j. 絵カード等を使って、正しい方法を示す指導・誘導」「k. 環境の設定を工夫する」「l. 型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導」「m. その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する」「n. その他」から当てはまるものすべて。(11) 指導を行った児童の中で最も指導の効果を感じた児童の学年・性別・併せ有する障害種・知的発達の程度、(12) 児童に生じた困難の場面、(13) 考えられる原因・理由、(14) 行った指導内容・対応に関しては、当てはまるものを選択し、空欄に記号で記入してもらった。(15) 具体的な指導内容・対応、(16)

その指導の結果（児童の様子）に関しては、空欄に記述してもらった。(17) その指導の効果の有無に関しては、効果があった場合に○、効果があるかないかわからなかった場合には△、効果がなかった場合には×を選択してもらった。(18) 指導の効果があった場合に、効果に繋がると考えられる支援や手立てに関しては、(17) で○（指導の効果があった）を選択した方に、記述式で回答してもらった。(19) 指導の効果がみられなかった場合に必要と感じた支援や手立てに関しては、(17) で△・×（効果あるかないか分からなかった・効果がなかった）を選択した方に、理由を記述式で回答してもらった。

4 分析方法

選択式の調査項目に関しては、有効回答数を母数として、該当教員数もしくは児童数の割合を算出した。自由記述式の調査項目に関しては、KJ法などを用いて分類した。

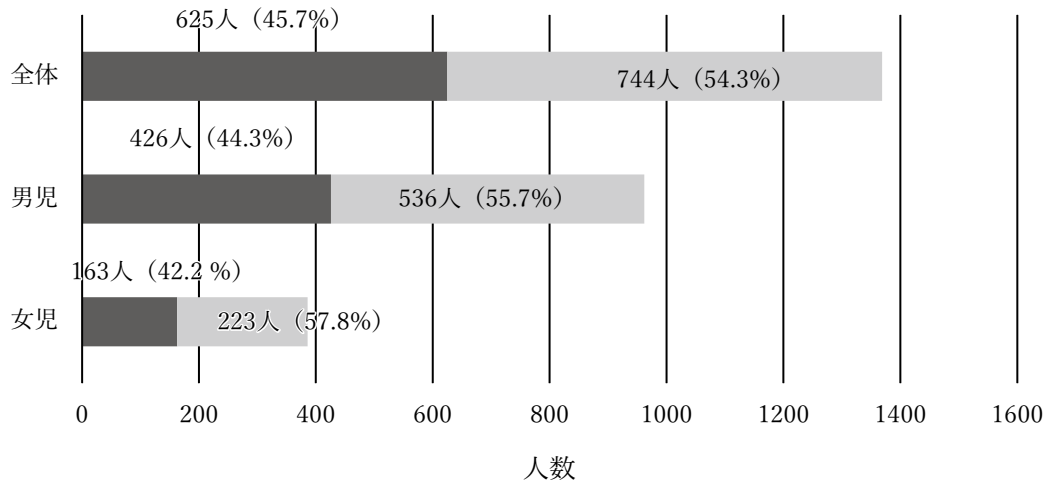
5 倫理的配慮

調査にあたり、個人情報保護や研究倫理などに関する事項を記載した文書を添付し、得られたデータは統計的に処理し、学校名や個人が特定されることがないことを調査用紙に明記し、返送をもって同意を得ることとした。

Ⅲ. 結果及び考察

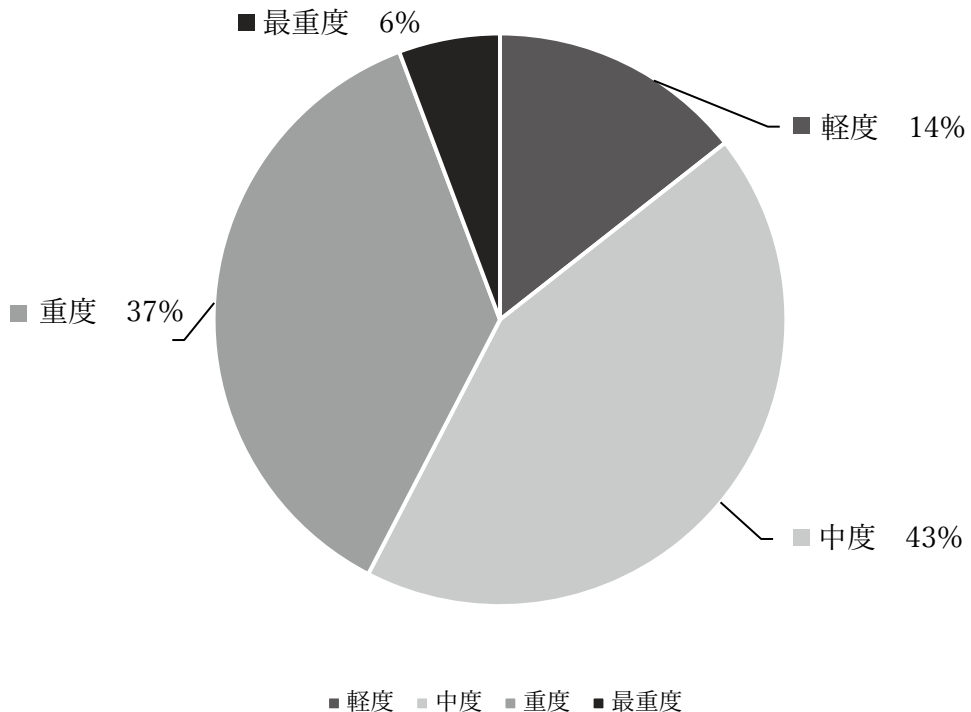
1 排泄行為に困難が生じる児童の実態について

(1) 排泄行為に困難が生じる児童の属性について；Table. 1に、知的障害特別支援学校小学部における排泄行為に困難が生じる児童に関する回答結果を示した（以下有効回答数は質問項目ごとの無回答を除く回答数としている）。有効回答215名中の担当する児童は1369名であり、そのうち男児962名、女児386名、無回答21名であった。排泄行為に困難が生じた児童の割合は625名（45.7%）であり、困難が生じた児童の性別ごとの割合は有効回答589名のうち、男児426名（44.3%）、女児163名（42.2%）であった。全体・男児・女児すべての属性において排泄行為に困難が生じる割合は児童全体の40%以上50%以下という結果であった（Fig.1）。Fig. 2では、排泄行為に困難が



■ 困難あり ■ 困難なし

Fig.1 排泄行為における困難の有無



■ 軽度 ■ 中度 ■ 重度 ■ 最重度

Fig.2 困難が生じた児童の発達の程度

生じる児童の属性について示した。知的発達の程度の割合は611名のうち、軽度88名 (14.4%)、中度264名 (43.2%)、重度224名 (36.7%)、最重度

35名 (5.7%) であり、中度と重度が全体の8割を占めている (Fig. 3)。知的障害と併せ有する障害種別の困難が生じた児童の割合は、排泄行為

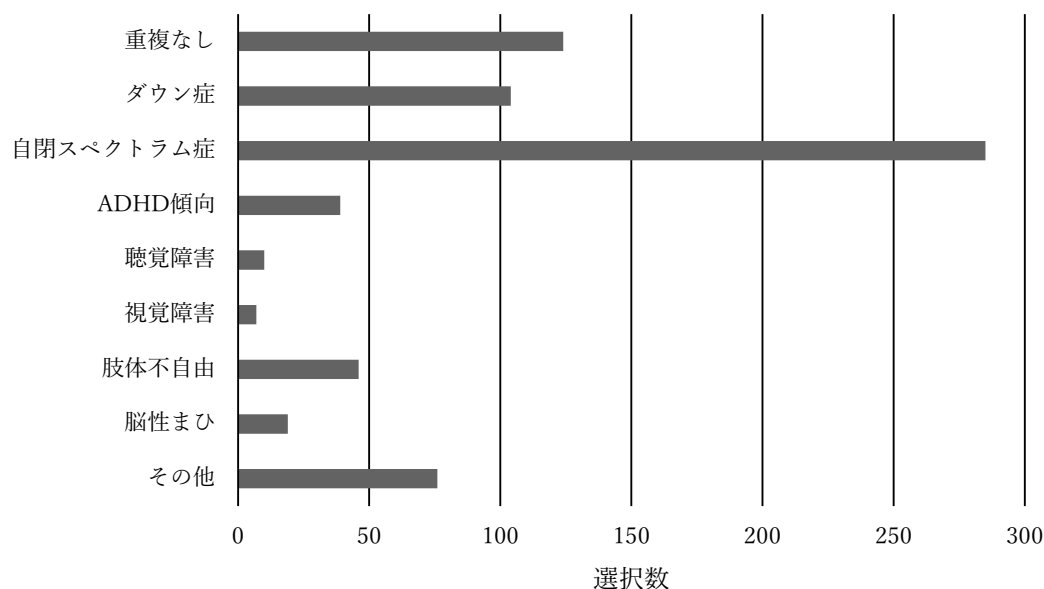


Fig.3 困難が生じた児童の併せ有する障害種

に困難が生じた児童625名のうち、重複していない（知的障害の）児童は124名（19.8%）、ダウン症は104名（16.6%）、自閉スペクトラム症は285名（45.6%）、ADHD傾向は39名（6.2%）、聴覚障害は10名（1.6%）、視覚障害は7名（1.1%）、肢体不自由は46名（7.4%）、脳性まひは19名（7.4%）、その他の障害は76名（12.2%）であった（Fig. 3）（この項目の質問に関する回答は複数選択可である）。

②排泄行為の一連の流れにおける困難の生起率について；Table 1に、知的障害特別支援学校小学部における排泄行為の一連の流れの中で、困難が生じた場面に関する回答結果を示した（以降①内の割合は、困難が生じた児童全体の件数からみた、場面ごとの困難が生じた児童の件数の割合である）。

入室前の項目（①オムツからパンツへの移行、②失禁に関しては4割近く、③尿意・④便意に対する意思表示）は困難が生じる児童全体の半数近くの割合で困難が生じることがわかる。また、⑭トイレトペーパーで拭くに関しては困難が生じる児童全体の6割を超えており本調査での排泄行為の一連の流れにおいて最も困難が生じる児童の割合が高かった。

困難が生じた児童が多い順に⑭トイレトペー

パーで拭く382名（61.6%）、④便意に対する意思表示310名（49.6%）、③尿意に対する意思表示303名（48.5%）、②失禁251名（40.2%）、①オムツからパンツへの移行237名（37.9%）という結果であり、⑤のトイレの入室までに困難が生じている児童の困難が生じた件数が、困難が生じた件数が多い5場面中、4場面を占めていることが分かる。

このことから畠山（2017）が示すように、知的障害児にとっては、児童の実態にもよるが、まずは排泄指導の第一ステップとしてトイレでの排泄ができるようにするための指導を行う必要があることが示唆された。また、先行研究ではあまり扱われていなかったが、今回の調査では⑭トイレトペーパーで拭く場面において、困難が生じた児童のうち6割に困難が生じるという結果であった。そのため、児童の排泄の自立に向けては排泄後のトイレトペーパーで拭く等、困難を抱える児童が多い場面についても指導する必要があると考えられる。

③困難が生じたと考えられる原因・理由について；Table 2の「原因・理由」では困難が生じた場面において、困難が生じたと教員目線で考えられる原因・理由を各項目の回答の中で上位3項目の回答結果を示した。

Table 1 場面ごとの困難が生じた割合

困難が生じた場面	件数	割合
①オムツからパンツへの移行	237	37.9%
②失禁	251	40.2%
③尿意に対する意思表示	303	48.5%
④便意に対する意思表示	310	49.6%
⑤トイレへの入室	88	14.1%
⑥便器の前で適切なタイミングで衣服の着脱を行う	108	17.3%
⑦必要以上の衣服の着脱（床に付く程度までズボンを下げてしまう等）	200	32.0%
⑧ドアの開閉・ドアを開けたままでの排泄	125	20.0%
⑨鍵の開閉・鍵を開けたままでの排泄	155	24.8%
⑩便器・便座の正しい使用の仕方（姿勢の持続・立ち位置等）	104	16.6%
⑪力む	72	11.5%
⑫便器に座るもしくは、便器前に立って尿を出す・出し切る	114	18.2%
⑬便器に座って便を出す・出し切る	135	21.6%
⑭トイレットペーパーで拭く	382	61.1%
⑮排泄物を触る・遊ぶ等の行為	61	9.8%
⑯トイレ内での水遊び	77	12.3%
⑰水を流す	50	8.0%
⑱手を洗う	126	20.2%
⑲その他	50	8.0%

①オムツからパンツへの移行、②失禁、③尿意に対する意思表示、④便意に対する意思表示、⑥便器の前で適切なタイミングで衣服の着脱を行うでは、感覚の未発達、身体機能の未発達、不快を感じていない等の児童の身体発達の遅れ等が原因の上位に挙がっていることが分かる。また、③尿意に対する意思表示、④便意に対する意思表示の場面においては、「コミュニケーションに問題があり、伝達できない」が4割を超え、⑤トイレへの入室の場面では、「場面の不慣れ・嫌悪」が4割を超えていることが分かる。最も困難が生じる場面として挙げられた⑭トイレットペーパーで拭くでは、「手先の操作技術の未獲得」が4割を占

めており、「まだ指導していない」が2割程度いることが分かる。

排泄に困難がある児童の困難の原因・理由を教員目線で回答を得た結果、排泄行為の一連の流れにおける場面ごとの違いは見られたものの、今回の調査では⑤⑦⑧⑨以外の15場面において生起要因の上位に身体発達の遅れ等の要因が挙げられた。場面ごとに結果を見ると、③尿意に対する意思表示、④便意に対する意思表示の場面においては、困難が生じる原因・理由として「コミュニケーションに問題があり、伝達できない」が4割を超え、最も多い原因・理由であった。⑤トイレへの入室の場面においては、「場面の不慣れ・嫌

Table 2 排泄行為の一連の流れにおいての実態一覧

項目	選択数 (%)	原因理由	選択数 (%)	指導法・対応	選択数 (%)
①オムツからパンツへの移行	237 (37.9%)	1 感覚の未発達	78 (32.9%)	1 定時誘導	120 (50.6%)
		2 不快を感じていない	50 (21.1%)	2 観察中（行動観察等）	50 (21.1%)
		3 身体機能の未発達	47 (19.8%)	3 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	34 (14.3%)
②失禁	251 (40.2%)	1 感覚の未発達	86 (34.3%)	1 定時誘導	167 (66.5%)
		2 物事に夢中になっている	75 (29.9%)	2 観察中（行動観察等）	50 (19.9%)
		3 コミュニケーションに問題があり、伝達できない	63 (25.1%)	3 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	47 (18.7%)
③尿意に対する意思表示	303 (48.5%)	1 コミュニケーションに問題があり、伝達できない	148 (48.8%)	1 定時誘導	156 (51.5%)
		2 感覚の未発達	108 (35.6%)	2 絵カード・サイン等を使って、意思表示をさせる	100 (33%)
		3 不快を感じていない	51 (16.8%)	3 観察中（行動観察等）	49 (16.2%)
④便意に対する意思表示	310 (49.6%)	1 コミュニケーションに問題があり、伝達できない	132 (42.6%)	1 定時誘導	101 (32.6%)
		2 感覚の未発達	108 (34.8%)	2 絵カード・サイン等を使って、意思表示をさせる	82 (26.5%)
		3 不快を感じていない	38 (12.3%)	3 観察中（行動観察等）	71 (22.9%)
⑤トイレへの入室	88 (14.1%)	1 場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的な経験の影響等も含む）	38 (43.2%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	37 (42%)
		2 こだわり・特性上	27 (30.7%)	2 定時誘導	24 (27.3%)
		3 情緒の不安定さ	11 (12.5%)	3 観察中（行動観察等）	13 (14.8%)
⑥便器の前で適切なタイミングで衣服の着脱を行う	108 (17.3%)	1 身体機能の未発達	28 (25.9%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	58 (53.7%)
		2 手先の操作技術の未獲得	24 (22.2%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	17 (15.7%)
		3 改善している途中	18 (16.7%)	3 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	12 (11.1%)
⑦必要以上の衣服の着脱（床に付く程度までズボンを下げてしまう等）	200 (32.0%)	1 習慣化してしまっている	68 (34%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	94 (47%)
		2 改善している途中	36 (18%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	39 (19.5%)
		3 まだ指導をしていない	33 (16.5%)	3 絵カード等を使って、正しい方法を示す指導・誘導	16 (8%)
⑧ドアの開閉・ドアを開けたままでの排泄	125 (20%)	1 まだ指導をしていない	45 (36%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	48 (38.4%)
		2 習慣化してしまっている	27 (21.6%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	40 (32%)
		3 改善している途中	22 (17.6%)	3 その場面の指導に介入していない（性別上・その他の理由等）	7 (5.6%)
⑨鍵の開閉・鍵を開けたままでの排泄	155 (24.8%)	1 まだ指導をしていない	74 (47.7%)	1 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	60 (38.7%)
		2 改善している途中	22 (14.2%)	2 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	42 (27.1%)
		3 習慣化してしまっている	21 (13.5%)	3 排泄行為の基本的な課題ではないと判断し、介助で良しとしている	19 (12.3%)

悪」が4割を超えていることが分かる。これまでもトイレの入室の場面における原因・理由に関しては、特別支援学級において「心身機能だけでなく、空間的要因に対して知的障害児が強い違和感や拒否感を抱いているために、入室拒否等の行為をしているという回答が多かった（西尾ら、2007）」と報告されていたように、指導する場は違うものの、知的障害児のトイレへの入室の場面

における困難の原因・理由の多くは環境や場の影響が占めていることが推察される。そして、これまでの研究では、その原因・理由に対して環境設定の工夫を改善策として提案している（西尾ら、2007）ことから、トイレへの入室場面においては、特別支援学校においても環境設定の工夫を施すことで、困難が改善される可能性が示唆される。⑮排泄物を触る・遊ぶ、⑯トイレ内での水遊

⑩便器・便座の正しい使用の仕方（姿勢の持続・立ち位置等）	104 (16.6%)	1 身体機能の未発達	32 (30.8%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	45 (43.3%)
		2 改善している途中	24 (23.1%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	19 (18.3%)
		3 まだ指導をしていない	15 (14.4%)	3 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	9 (8.7%)
⑪力む	72 (11.5%)	1 身体機能の未発達	30 (41.7%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	18 (25%)
		2 感覚の未発達	24 (33.3%)	2 観察中（行動観察等）	15 (20.8%)
		3 まだ指導をしていない	14 (19.4%)	3 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	13 (18.1%)
⑫便器に座るもしくは、便器前に立って尿を出す・出し切る	114 (18.2%)	1 身体機能の未発達	33 (28.9%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	41 (36%)
		2 感覚の未発達	32 (28.1%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	25 (21.9%)
		3 改善している途中	24 (21.1%)	3 その場面の指導に介入していない（性別上・その他の理由等）	23 (20.2%)
⑬便器に座って便を出す・出し切る	135 (21.6%)	1 感覚の未発達	37 (27.4%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	39 (28.9%)
		2 身体機能の未発達	35 (25.9%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	29 (21.5%)
		3 まだ指導をしていない	22 (16.3%)	3 観察中（行動観察等）	29 (21.5%)
⑭トイレトーパーで拭く	382 (61.1%)	1 手先の操作技術の未獲得	159 (41.6%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	183 (47.9%)
		2 まだ指導をしていない	75 (19.6%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	96 (25.1%)
		3 身体機能の未発達	72 (18.8%)	3 観察中（行動観察等）	29 (7.6%)
⑮排泄物を触る・遊ぶ等の行為	61 (9.8%)	1 こだわり・特性上	18 (29.5%)	1 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	30 (49.2%)
		2 不快を感じていない	17 (27.9%)	2 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	15 (24.6%)
		3 その他	9 (14.8%)	3 環境の設定を工夫する・その場面の指導に介入していない	6 (9.8%)
⑯トイレ内での水遊び	77 (12.3%)	1 こだわり・特性上	31 (40.3%)	1 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	41 (53.2%)
		2 改善している途中	13 (16.9%)	2 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	24 (31.2%)
		3 物事に夢中になっている	9 (11.7%)	3 環境の設定を工夫する	9 (11.7%)
⑰水を流す	50 (8%)	1 身体機能の未発達	15 (30%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	18 (36%)
		2 まだ指導をしていない	12 (24%)	2 まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている	13 (26%)
		3 こだわり・特性上	8 (16%)	3 型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導	10 (20%)
⑱手を洗う	126 (20.2%)	1 改善している途中	31 (24.6%)	1 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	83 (65.9%)
		2 手先の操作技術の未獲得	25 (19.8%)	2 型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導	29 (23%)
		3 こだわり・特性上	25 (19.8%)	3 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	12 (9.5%)
⑲その他	50 (8%)	1 こだわり・特性上	11 (22%)	1 観察中（行動観察等）	13 (26%)
		2 改善している途中	8 (16%)	2 児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	12 (24%)
		3 身体機能の未発達	7 (14%)	3 その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	10 (20%)

びの不適切な行動に関しては、「こだわり・特性上」が上位を占めており、排泄行為の中の問題行動としては、こだわりや特性が原因・理由に多く上がることが示された。

2 教師による排泄指導・対応について

(1)排泄指導・対応の実態について；Table 2の

「指導法・対応」では、指導法・対応に関して各項目の回答の中で上位3項目の回答結果を示した。場面ごとの指導法・対応の実態としては、①②③④⑤⑪⑬⑭の場面で観察中（行動観察等）の回答数が多く、これらの場面での原因・理由は、身体発達の遅れ等が上位に挙がっているという点で共通していることが明らかとなった。「観察中」

という対応が多かったことに関しては、身体発達の遅れ等によりまだ指導の段階ではないと判断していることや、指導の段階を見極めている等の背景が推察される。また、①③④を除くすべての場面で教員による付き添いの指導が行われていることから、知的障害児の排泄指導において、教員が時間をかけて丁寧に付き添った指導や段階を見極めるために観察している対応が多いという実態が明らかとなった。しかし、西尾ら（2007）においては、排泄指導だけに時間をかけられない現状にあることが指摘されており、今後は教員が排泄時間に付き添うだけでなく、より効果が出やすい適切な排泄指導を実践できるようにするために、児童の実態等をより詳細に調べ、指導法についての検討をする必要がある。また、排泄指導において、トイレへの入室以降の行為に関しては、トイレへの入室までの場面と比較して、「指導の段階ではない」と判断される割合が高い傾向が見られ

た。このことから、トイレへの入室以降の場面の指導は小学部段階においては、動作等の技能の獲得が高度であり指導の対象にならない可能性があることが推察される。今回の調査の実態では⑭トイレトペーパーで拭く場面が最も困難が生じる場面でありその原因・理由としては「手先の操作技術の未獲得」が41.6%と4割を占めている。この場面での指導法・対応は「児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする」が47.9%の半数近い割合で、「まだ指導の段階ではないと判断し、介助で良しとしている」が25.1%であった。最も困難が生じているにもかかわらず、付き添う指導や介助で良しとする判断が多いことから、この場面に関しては指導法の検討を重ねていくことの必要性が示唆された。

(2)効果的だと考えられる排泄指導・対応について；Fig. 4・Table 3は効果的な指導・対応を行った場面ごとの回答件数を示している。回答者

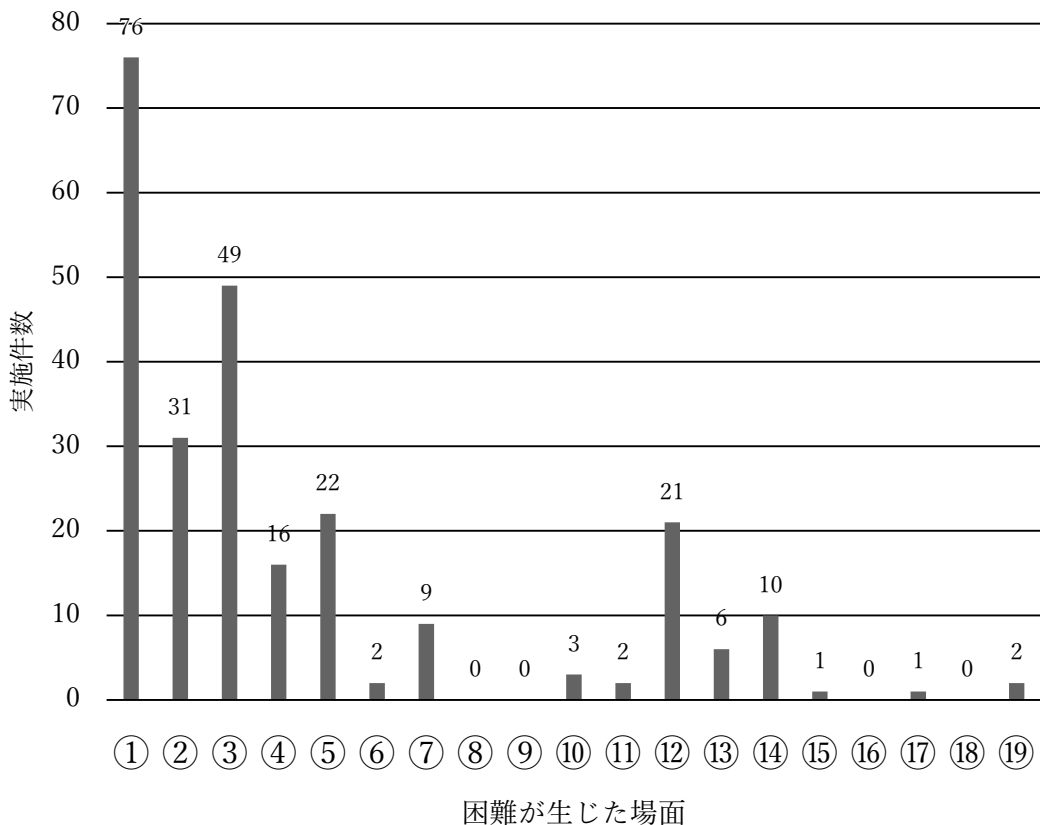


Fig.4 効果的な指導法の実施件数

Table 3 効果的な指導法場面での原因・理由・指導法・具体的な指導内容

項目	選択数 (%)	原因理由	選択数 (%)	指導法・対応	選択数 (%)
①オムツからパンツへの移行	76 (30.3%)	感覚の未発達	31 (40.8%)	定時誘導	61 (80.3%)
		習慣化してしまっている	23 (30.3%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返 し行う指導	17 (22.4%)
		不快を感じていない	17 (22.4%)	環境の設定を工夫する	15 (19.7%)
②失禁	31 (12.4%)	感覚の未発達	11 (35.5%)	定時誘導	24 (77.4%)
		物事に夢中になっている	11 (35.5%)	絵カード・サイン等を使って意志表 示をさせる	9 (29%)
		不快を感じていない	6 (19.4%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	8 (25.8%)
③尿意に対する意思表示	49 (19.5%)	コミュニケーションに問題があり、 伝達が出来ない	34 (69.4%)	絵カード・サイン等を使って意志表 示をさせる	34 (69.4%)
		感覚の未発達	14 (28.6%)	定時誘導	30 (61.2%)
		物事に夢中になっている	6 (12.2%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	15 (30.6%)
④便意に対する意思表示	16 (6.4%)	コミュニケーションに問題があり、 伝達が出来ない	8 (50%)	定時誘導	9 (56.3%)
		習慣化してしまっている	4 (25%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	7 (43.8%)
		感覚の未発達	4 (25%)	絵カード・サイン等を使って意志表 示をさせる	7 (43.8%)
⑤トイレへの入室	22 (8.8%)	場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的 な経験の影響等も含む）	17 (77.3%)	環境の設定を工夫する	11 (50%)
		こだわり・特性上	6 (27.3%)	定時誘導	10 (45.5%)
		情緒の不安定さ	4 (18.2%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	9 (40.9%)
⑥便器の前で適切なタイミング で衣服の着脱を行う	2 (0.8%)	身体機能の未発達	2 (66.7%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	1 (50%)
		感覚の未発達	1 (33.3%)	その他	1 (50%)
		手先の操作技術の未獲得	1 (33.3%)		
⑦必要以上の衣服の着脱（床に 付く程度までズボンを下げてし まう等）	9 (3.6%)	習慣化してしまっている	6 (66.7%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	7 (77.8%)
		こだわり・特性上	3 (33.3%)	絵カード等を使って、正しい方法を 示す指導・誘導	6 (66.7%)
		まだ指導をしていない	2 (22.2%)	その場ですぐに不適切な行動をやめ させる・注意する	3 (33.3%)
		場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的 な経験の影響等も含む）	2 (22.2%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返 し行う指導	3 (33.3%)
⑧ドアの開閉・ドアを開けたま までの排泄	0				
⑨鍵の開閉・鍵を開けたままの 排泄	0				
⑩便器・便座の正しい使用の仕 方（姿勢の持続・立ち位置等）	3 (1.2%)	身体機能の未発達	1 (33.3%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行 う・正しい操作をする	2 (66.7%)
		場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的 な経験の影響等も含む）	1 (33.4%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返 し行う指導	2 (66.8%)
		不快を感じていない	1 (33.5%)	絵カード等を使って、正しい方法を 示す指導・誘導	1 (33.3%)
		感覚の過敏さ	1 (33.6%)	環境の設定を工夫する	1 (33.3%)
		習慣化してしまっている	1 (33.7%)	定時誘導	1 (33.3%)

⑪力む	2 (0.8%)	身体機能の未発達	2 (100%)	定時誘導	1 (50%)
		習慣化してしまっている	1 (50%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	1 (50%)
		こだわり・特性上	1 (50%)	環境の設定を工夫する	1 (50%)
⑫便器に座るもしくは、便器前に立って尿を出す・出し切る	21 (8.4%)	感覚の未発達	9 (42.9%)	定時誘導	12 (57.1%)
		場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的な経験の影響等も含む）	6 (28.6%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	9 (42.9%)
		こだわり・特性上	5 (23.8%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導	8 (38.1%)
⑬便器に座って便を出す・出し切る	6 (2.4%)	習慣化してしまっている	3 (50%)	定時誘導	4 (66.7%)
		身体機能の未発達	2 (33.3%)	環境の設定を工夫する	3 (50%)
		場面の不慣れ・嫌悪（過去の嫌悪的な経験の影響等も含む）	2 (33.3%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	2 (33.3%)
		こだわり・特性上	2 (33.3%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導	2 (33.3%)
⑭トイレトペーパーで拭く	10 (4%)	手先の操作技術の未獲得	6 (60%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	8 (80%)
		習慣化してしまっている	3 (30%)	型（ルーティン）を決めて、繰り返し行う指導	3 (30%)
		不快を感じていない	2 (20%)	絵カード・サイン等を使って意思表示をさせる	2 (20%)
		まだ指導をしていない	2 (20%)		
⑮排泄物を触る・遊ぶ等の行為	1 (0.4%)	不快を感じていない	1 (100%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	1 (100%)
		習慣化してしまっている	1 (100%)	その場ですぐに不適切な行動をやめさせる・注意する	
⑯トイレ内での水遊び	0				
⑰水を流す	1 (0.4%)	習慣化してしまっている	1 (100%)	児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をする	1 (100%)
⑱手を洗う	0				
⑲その他 ・頻尿 ・車椅子から便座への移乗	1 (0.4%)	習慣化してしまっている・こだわり・特性上	1 (100%)	定時誘導	1 (100%)
	1 (0.4%)	身体機能の未発達・手先の操作技術の未獲得	1 (100%)	その他	1 (100%)

数が多かった順に①オムツからパンツへの移行、③尿意に対する意思表示、②失禁、⑤トイレへの入室であり、①オムツからパンツへの移行から⑤トイレへの入室の、オムツでの排泄からトイレでの排泄に関する場面が上位に入っていることが分かる。Table 3に、排泄行為の一連の流れの中で、困難が生じた場面で行った指導のうち効果的だと考えられる指導についての回答結果を示した。効果的な指導法・対応については、①から⑤までのすべての場面で定時誘導が上位に入っていることがわかる。特に、①オムツからパンツへの移行では、8割以上の教員が定時誘導を効果的な指導法として挙げている。原因理由としては、感覚の未発達、オムツの習慣化といった項目が多くみられ、時間を決めトイレで排泄することを練習することにより効果が見られたことが推察された。ま

た、②③④では原因理由において、感覚の未発達やコミュニケーションの問題が挙げられ、効果的な指導法・対応の上位がすべて定時誘導、絵カード・サイン等を使って意思表示をさせる、児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をするであった。⑤トイレへの入室に関しては、原因として場面の不慣れ・嫌悪といったことが挙げられた。児童の状況としては、学校と家庭のトイレの環境が異なる事への戸惑い等が想定される。効果的な指導法・対応の回答の上位には、環境の設定を工夫することや定時誘導が挙げられた。これまで（西尾ら、2007）の調査からも、⑤トイレへの入室の場面における指導法・対応として環境の工夫の重要性が考えられる。今回の調査で最も困難が生じる児童の割合が多かった⑭トイレトペーパーで拭く（61.1%）に関しては、効果的な

指導法の回答は5.5%にとどまった。加えて、児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をするが8割を超えていた。原因理由についても様々な内容が散見されたことから、より詳細に原因理由について実態を把握することで、効果的な指導につながる事が予測される。また、効果のあった指導法の自由記述の回答から明らかになったように、⑭の場面においては「授業内でトイレトペーパーを巻き取る練習を行う」など、トイレトペーパーで拭く動作の中でも動作が細分化されて指導していることが分かった。そのため、⑭の場面に関しては「トイレトペーパーをとる段階」、「手でトイレトペーパーをもって身体をひねって拭く段階」等さらに行動を細分化して調査し、場面に合った効果的な指導法について再度検討していく必要があるだろう。今回得られた自由記述の中の具体的な指導法対応からは、一つの場面における指導でも様々な指導法や対応を組み合わせていることが分かった。排泄指導においては、児童の実態に合わせて様々な指導法を組み合わせて行うことも効果の有無に繋がる事が示唆される。

3 効果的な指導を行うための教員に必要な手立てについて

この質問では、効果的だと思った指導法・対応を行った教員にはその指導や対応にたどり着いた経緯を自由記述してもらい、効果的な指導法・対応ができなかった教員には効果的な指導法をするために必要な手立てを自由記述してもらった。有効回答200名のうち、効果的な指導法にたどり着いた経緯についての記述157名(78.5%)であり、必要な手立てについての記述は43名(21.5%)であり、回答が得られたそれぞれの記述について、KJ法を用いて分類した(ここでは大グループの分類名を『』で示し、小グループの分類名を「」で示している)。

(1)効果的な指導法にたどり着いた経緯；効果的な指導法にたどり着いた経緯についてKJ法で分類した結果をTable 4に示している。これまでに効果的な指導法にたどり着いた経緯として回答数が多かったグループは多い方から『教員自身』『連携』『参考』『他者からの助言』という順であった。最も回答数が多かった『教師自身』の中でも、「実

態把握」が多かった。このことから、効果的な指導を行った多くの教員は自身の児童の実態把握によって効果的な指導法を考えていることが示唆された。また、『連携』の中の「教員間での連携」が「実態把握」に次ぐ回答数であり、具体的な内容としては「ペアの教員」や「前担任」との連携が挙げられていることから、「教員間での連携」の中でも特に、前担任やペア教員など児童に深く関わる教員との連携は効果的な指導をする上で重要であると推察された。さらに、『他者からの助言』の中でも「先輩教員からの助言」「他教員からの助言」が多く上がっている。このことから、指導経験や知識のある教員からの助言が多いことが推察され、児童に密に関わる教員間だけでなく、先輩教員等との関わりも重要であることが考えられる。一方、『参考』の「研修会」は2件のみであり、2件も排泄指導の内容ではない研修会であったことから、現在、排泄指導に関する研修会が開かれる機会は少ないことが推察される。

(2)効果的な指導法を行うために必要な手立て；効果的な指導法を行うために必要な手立てについてKJ法で分類した結果をTable 5に示している。必要な手立ての分類では、『支援者間での連携に関して』が半数以上(51.2%)の回答件数が得られた。支援者間の連携に関してはこれまでも「様々な視点、専門性を持つ複数の大人が連携して子どもの教育にあたることの重要性は高い(小田, 2021)」と示されているように、教育を行う上では必要であり、効果的な排泄指導を行うにあたって必要とされていることが示唆される。しかし、必要な手立ての分類に含まれていることから、十分な連携がとれない現場が多くあったと推察される。また、この『支援者間での連携に関して』では半数近くが「家庭との連携」に分類されていることから、特に家庭と連携が不十分で必要と感じており、手立てとして求められていることが推察される。そのため、今後は『支援者間での連携に関して』の中でも特に家庭と円滑な連携がとれるような手立ての検討が必要であると示唆される。また、必要な手立てに関する分類では、『指導内容に関して』(61%)がグループとして最も多く、その中でも「研修」が11件挙がっている。このことから、教員の中では指導内容を知るための研修会等の学ぶ場を求められていることが示唆

Table 4 KJ法による効果的な指導法にたどり着いた経緯の分類

大グループ	件数	割合	小グループ	件数	具体例
教員自身	63(6)	40.1%	実態把握	52(2)	・発達年齢や生活年齢・実態等を踏まえて計画をたて、指導
			過去の指導	9(3)	・これまでに行ってきた指導
			経験	2(1)	・自身の育児経験
連携	48(9)	30.6%	教員間での連携	33(11)	・前年度の教員との情報共有・ベアの教員との話し合い
			家庭との連携	19(11)	・保護者・教員間での記録の共有
			関係機関との連携	4(3)	・家庭や寄宿舎との連携
参考	37(15)	24%	参考書	23(15)	・トイレトレーニングの指導書を参考にした
			指導方法	8	・行動療法を使った
			他教員の指導参考	4(4)	・先輩方の指導法を参考にした
			研修会	3(1)	・障害特性に関する研修会
			文献	2(1)	・先行研究や文献を参考にした
他者からの助言	30(14)	19.1%	先輩教員からの助言	14(6)	・先輩教員からのアドバイス
			他教員からの助言	7(3)	・他教員からのアドバイス
			同僚からの助言	5(4)	・同僚からの助言
			周囲からの助言	3(2)	・周囲からの助言
			関係機関からの助言	1	・担当医からもらった医学的助言

Table 5 KJ法による効果的な指導を行うために必要な手立ての分類

大グループ	件数	割合	小グループ	件数	具体例
指導内容に関して	25	61%	研修	11(5)	・排泄指導に関する研修会
			知りたかった内容	8(2)	・児童理解の仕方・定時誘導以外の方法
			知る機会	7(1)	・効果的な指導法について学ぶ機会
			教具	2(1)	・チェックリストの作成・性能の高いオムツ
支援者間での連携に関して	21	51.2%	家庭との連携	10(5)	・保護者との連携
			関係機関との連携	9(6)	・放課後等デイサービスとの連携・医療機関からの医学的助言
			教員間での連携	4	・経験豊富な教員からの助言
指導を行うための整備に関して	5	12.2%	環境整備	2(2)	・問題行動を起こさないための環境の工夫
			時間確保	2(1)	・排泄指導をする時間の確保
			人員確保	1(1)	・排泄指導を行えるような教員数の確保

される。さらに、必要な手立てでは「知りたかった内容」（特定の場面や指導内容に焦点をあてた効果的な指導法）が8件挙がっており、効果的な指導法や対応を知る機会がなかったことや、指導方法が分からなかったために、効果的な指導を行えなかった教員がいることが推察される。

以上のことから、児童にとって効果的な排泄指導・対応を行うためには、教員自身が適切な実態把握を行うことが重要であると示唆される。一方、現場の声からも挙げたように、まずは正し

い適切な実態把握の仕方や指導法を行えるように、参考資料の作成や排泄指導に関する研修に参加できる機会を設けることの必要性が示唆される。たどり着いた経緯にも、排泄指導に関する研修会が少ないことが推察されたことを踏まえると、今後、教員自身が排泄指導に関して学べる機会を増やすことの重要性が示唆される。

IV. まとめ

1 排泄行為に困難が生じる児童の実態について

本研究では、知的障害特別支援学校小学部において、排泄行為の一連の流れの中で困難が生じる児童は45.7%と在籍する児童の半数近くいることが明らかになり、その児童の知的発達程度は中度以上が8割を超えていた。困難が生じた排泄行為の場面については、「トイレトペーパーで拭く」に困難が生じる児童の割合が排泄行為に困難が生じる児童の6割を超え最も多かったが、先行研究ではあまり見られなかった。そのため、今後は困難を抱える児童が多い場面にも焦点をあてた場面ごとの指導についても検討すべきであると示唆された。また、排泄行為の一連の流れにおいては、トイレへの入室までの場面で困難が生じる割合が高い傾向であった。

2 教師による排泄指導・対応について

教師による排泄指導に関しては、オムツでの排泄からトイレでの排泄までの場面においては定時誘導が指導法として使われていることが推察され、排泄行為の一連の流れの多くの場面で児童に付き添った指導が行われていた。また、学校においては、付き添い等の排泄指導における教員の役割の大きさが推察された。しかし、西尾・三宗ら(2007)は排泄指導の困難さや教員の負担も示していることから、今後は、教員が付き添う指導以外の効果的な指導法を検討する必要がある。トイレトペーパーで拭く場面に関しては、困難を抱える児童が多いものの、介助で良しとする判断をしている場面も多く見られた。この場面においては「トイレトペーパーをちぎる」「トイレトペーパーを使って自分で拭く」等、場面を細分化した調査も行う必要があるだろう。

これまでに知的障害特別支援学校で行われてきた排泄指導の中で、教員自身が効果的だったと考える指導法に関しては、トイレへの入室までの件数が194件(77.2%)であったことに対し、トイレに入って以降の動作においては指導法件数は57件(22.8%)と少なく、効果的な排泄指導の実践例の場面に偏りがあった。このことから、本調査からも畠山(2017)の指摘と同様に、トイレでの排泄以降の場面での指導研究がまだ進んでいないことにより効果的な指導の事例件数の偏りが

あったことが推察される。また、排泄の自立の目標がトイレへ入室して排泄するまでになっていること、排泄以降の場面における技術獲得や指導が高度であること等が推察された。今回の調査で最も困難が生じる割合が高かったトイレトペーパーで拭くに関しては、児童の横に付き添って言葉掛けを行う・正しい操作をするが8割を超える結果となった。回答件数が10件であったことや、トイレトペーパーで拭く場面をさらに行動ごとに細分化できることが考えられるため、さらなる検討の必要性が示唆される。

3 効果的な指導法・対応を行うための教員に対する手立てについて

子どもたちが適切な指導を受けられるための効果的な排泄指導が行えるように、教員に対する手立てについてKJ法で分類して検討した。その結果、たどり着いた経緯の中でも排泄行為に関する研修会はなく、必要な手立てとしても多くの教員が研修会を挙げていたことを踏まえると、現在、排泄指導に関する研修会が少ないことが推察される。効果的な指導・対応を行うためには、教員自身が適切な実態把握を行うことが重要であると推察されたことから、まずは適切な実態把握や指導法を行えるようにするための、参考資料の作成や排泄指導に関する研修に参加できる機会を設ける必要があると示唆された。また、児童と関わりのある教員間での連携はもちろん、先輩教員や知識の豊富な教員からの助言などを受けられる職場環境を整える必要もあると考えられる。また、家庭との連携が重要であると推察されたことから、家庭との連携がとりやすい手立ても検討し、提案していく必要があるだろう。

今後の課題は、以下の3点が挙げられる。まず、本研究では知的障害特別支援学校小学部全体の实態把握を行うために全体性を重視した研究を行った。最初の課題は実態把握の点である。本研究では調査対象の学級の在籍する全児童の属性まで調査を行っていなかったため、排泄行為に困難が生じる児童の知的発達程度や障害種ごとの生起率が明確にはならなかった。今後は知的発達程度や障害種ごとでの排泄における困難の生起率の実態を明らかにすることで、生じる困難を予測することや、よりスムーズに実態把握や手立てを行い、

適切なタイミングで指導に移ることを期待する。2点目は、指導法の調査方法・分析に関してである。知的障害特別支援学校での排泄行為の一連の流れにおける全体としての実態把握はできたものの、児童一人ひとりの背景までを明確にできていない。本来、指導法や対応は児童の実態（併せ有する障害種・知的発達程度等）により異なることが前提であることを考慮すると、児童の実態や排泄に困難を及ぼす背景について明らかにした上で、検討する必要がある。また、今回は指導法に関しては実態と効果的であった指導について分けて回答してもらったが、実態で回答してもらった指導に効果があつた場合とそうでない場合が考えられる。調査をする時期を学期末にすることや、縦断的な研究として検討することで、より効果的な指導を明らかにできるだろう。3点目は、効果的な指導法に関して、教員目線での児童の排泄行為の実態把握や効果的な指導法の提案等、教員の主観が含まれる調査であつたことが課題である。今後は、児童に対する適切なアセスメントに基づいて実態把握をし、より詳細な客観的視点から指導の効果の有無を検討することを期待する。

謝辞

本研究にご協力いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 畠山高宏 (2017)：肢体不自由のある児童に対する主体的な排尿行動獲得に向けた支援の有効性について。教育実践研究, 27, 229-234.
- 2) 飯田雅子 (1998)：発達に遅れがある子どもの日常生活指導 3 排泄指導編。学習研究社 (学研)。
- 3) 今枝史雄・山内由稀 (2021)：知的障害児の「日常生活の指導」における家庭等への般化に向けた支援方法の検討－先行文献の分析を通して－。大阪教育大学障害児教育研究紀要, 44, 1-14.
- 4) 岩崎清隆 (2017)：標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野人間発達学第2版。医学書院。
- 5) 神山努・野呂文行 (2011)：自閉性障害児の排泄行動に対する保護者支援の検討－機能的アセスメントに基づいた指導手続きの検討－。行動分析学研究, 25 (2), 153-164.
- 6) 武藤崇・唐岩正典・岡田崇宏・小林重雄 (2000)：トイレットマネジメント手続きによる広汎性発達障害児の排尿行動の形成。特殊教育学研究, 38 (2), 31-42.
- 7) 西尾幸一郎・三宗省三・小山美代・水野弘之 (2007)：学校施設における知的障害児の排泄行為に関わる困難の実態。日本建築学会技術報告集, 13 (25), 225-230.
- 8) 小田郁予 (2021)：学校における多職種連携研究の課題と展望－連携概念の定義と連携研究を捉える視点－。東京大学大学院教育学研究科紀要, 61, 353-364.
- 9) 篠田好美 (2021)：知的障害児の排泄行動の学習。福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要, 3, 1-6.
- 10) 谷田貝公昭・高橋弥生 (2008)：基本的生活習慣の発達基準に関する研究。目白大学短期大学部研究紀要, 45, 67-81.

